

5 自然環境の状況

中部地方には、温暖な太平洋沿岸部から冷涼で地形も急峻な高山に至るまでの様々な環境が分布しており、それに応じての様々な植生が見られます。

沿岸部から標高 600m程度までの間は概ね常緑広葉樹林帯に属し、本来は主にシイ・カシ類から成る森林が広がっている地域です。また、標高 600～1,600m程度の間は落葉広葉樹林帯であり、本来はブナを主体とする森林が広く分布します。しかし、これらの地域では、長年にわたる薪炭材の採取や、近年の植林などの影響により本来の植生の多くは失われており、里地・里山と呼ばれる落葉広葉樹林の代償植生や、スギ・ヒノキ・カラマツなどの植林地が広く分布しています。

一方、主に日本海側の白山などを中心とする地域には、ブナなどを主体とする自然植生が残存しています。また、冬季の日本海側は季節風の影響により多雪な環境となっており、雪の少ない太平洋側とは同じブナ林であっても種構成等が異なっています。

標高 1,600mを越えると亜高山帯針葉樹林が広く分布しますが、白山などの多雪環境では、積雪に弱い針葉樹林に代わって草本から成る高山植生に類似した植生が成立し、地域の特徴的な景観を形成しています。また、概ね標高 2,400m以上の、特に尾根筋を中心に、低温、強風及び土壌の発達の乏しい条件下でも成立しうる高山性の草本群落が発達しています。

このほか、低地から高山に至る様々な場所で、湿性の草本群落、いわゆる湿原が点在しており、地域の特徴的な植生となっている箇所も多くなっています。特に、愛知県、岐阜県、三重県の丘陵、台地下の低湿地及びその周辺には、東海丘陵要素と呼ばれる、地域に独特の種群が存在しています。

第5回自然環境保全基礎調査によれば、県土に占める自然植生（植生自然度9・10）の割合は、富山県で30.0%、長野県で18.6%、岐阜県で14.8%となっており、中部地方は本州の中では比較的自然植生が多く残っています。特に富山県は、県土に占める自然植生の割合が全国3位（1位北海道、2位沖縄）となっています。また、岐阜、富山、石川、福井、長野の各県では里山（植生自然度7・8）の割合も全国平均と比べて高くなっています。

県土に占める自然公園（国立公園、国定公園、県立自然公園）の割合（平成24年4月1日現在）は、三重県34.9%、富山県29.6%、長野県20.5%、岐阜県18.4%、愛知県17.2%、福井県14.8%、石川県12.6%と、全国的平均（14.4%）と比べて高い水準となっています。国立公園の年間利用者数（平成22年）は、全国の国立公園の中でも2番目に広大な面積を有する上信越高原国立公園が2,588万人、リアス式海岸及び周辺の丘陵地から成る伊勢志摩国立公園が820万人、山岳登山等で親しまれている中部山岳国立公園が917万人、日本三名山として古くから山岳信仰の対象となっている白山国立公園が106万人となっています。

図 自然公園等分布図

